

千葉県歴史教育者協議会依頼文（3000字制限）

2012年出版予定「おはなし千葉県の歴史」No.42「千葉市への空襲」（県内空襲、空襲による子どもの犠牲）、読者は小学校高学年―中学生を対象にする

約 900 人が殺された千葉空襲

千葉市空襲と戦争を語る会事務局 伊藤章夫

アジア・太平洋戦争は1945年8月15日に日本の無条件降伏で終わりました。この年には、アメリカ軍の大型爆撃機 B29 が日本の都市に爆弾を落としました。全国で約 50 万人の市民が亡くなり、千葉市の空襲でも約 900 人の市民が殺されました。

6月10日空襲

終戦 2 か月前の 6 月 10 日の朝早く、アメリカ軍は千葉の軍用航空機工場と輸送機関（鉄道機関区）を空爆しました。爆弾は工場をそれて千葉市蘇我町の民家に落ち、中心市街地にも爆弾が投下され、約 300 人が犠牲になりました。この爆弾の爆発力は地上で平均直径 8m、深さ平均 3.5m の穴をあける威力があったので、爆弾が落ちた所では民家や防空壕は跡かたもなく破壊されました。爆弾は破裂すると鉄の破片が飛散して身体に突き刺さり人を殺しました。また、強い爆発は身体をバラバラにして、吹き飛ばしました。

蘇我地区では、千葉市中央区の蘇我駅近くの福正寺に 152 名戦災犠牲者碑があります。千葉鉄道機関区の 23 人犠牲者については JR 千葉支社に碑があります。朝、勤労働員で工場に向かっていた航空工業学校の生徒は、突然の空襲で機関区の防空壕に避難しようとした。しかし、中はすでに満員でやむなく逃げだした時、爆弾が機関区に落ちて、その爆風で引き飛ばされましたが、助かりました。後で見た機関区は、鉄のレールが曲がり空を向いており、防空壕は破壊されていました。防空壕は命を守るほど丈夫でなかったのです。

千葉女子師範学校の 10 名の犠牲者については千葉駅前通りに天女を形どった彫刻の碑があります。女子師範学校で生存した生徒は、爆弾攻撃の後、一瞬沈黙の世界になり、防空壕から出てきたら校舎がなく、「痛い、痛い」と言う声があちこちから聞こえ、倒れていた女学生を起こすと顔がめっちゃめっちゃになっていたと証言しています。

千葉病院に入院していた小学生 2 年の男子は、看病に来て病院に泊まっていた父とともに殺されました。

7月7日空襲

2 回目の空襲は、終戦の 1 か月前の 7 月 6 日深夜から 7 日の早朝にかけて千葉市街地への焼夷弾による大規模な空襲でした。別名「七夕空襲」とも言われています。焼夷弾は燃料を油脂で固めた筒状の爆弾で、当時の日本の木造建築物を焼き払うために開発されたものです。夜間の空襲は、空襲を正確に行うために、先ず照明弾が投下されました。町中が真昼のような明るさになったので「マッピーカリ」と呼ばれていました。その後、たくさんの

焼夷弾と爆弾が投下されました。この空襲で、中心市街地は炎に包まれ、街中が火災になると空気が高温になり、旋風が起きて、火災が一層激しくなり、自然発火する状態になり、市民は逃げるしかすべがありませんでした。その上昇気流で明け方に、市街中心部に雨が降りました。

千葉市本町小学校には、入口に地下道がありました。夜間空襲の時、逃げ場を失った人たちが地下道に避難しました。しかし、反対側の鉄の扉が閉ざされており、空襲の激化と共に熱風が地下道に入り込み、十数名が焼死しました。このことは本町小学校の記念碑に記録されています。

ある千葉高等女学校生徒は爆弾の爆風を避けるために、母と千葉中学校の弟と3人で地上に伏せていました。近くに落ちた爆弾で、彼女は足にケガをし、弟は即死し、母は足に重傷を負いました。翌朝、母は大学病院に入院しましたが、足を切断しなければならなくなりました。空襲が手術中も続いていましたが、手術は成功しました。

こんな悲しい話もあります。3月10日の東京大空襲で父を亡くした小学校6年の少女は戦争を一時的に避けるため、母に連れられて千葉市寒川に逃げて来ました。7月7日の千葉空襲の日、戦闘機の機関銃で小学校5年の弟と3歳の妹を亡くし、その少女も手にケガをしました。

この大空襲で市街地の7割、8904戸の家屋は焼失し、約900人が犠牲になりました。市街地は焼け野原になり、空襲後に、千葉駅に降り立った人は、駅から街中が見渡せるほどに家が焼けて無くなっていたと言われます。7月の空襲は、千葉市街地北部の鉄道連隊など木造の軍事施設も焼き払いました。

空襲の背景と学校

千葉市は陸軍の施設が北部に集中的に配置されており、このことがアメリカ軍の空襲の対象になったわけです。

日本軍の奇襲で始まった戦争も、1944年7月、圧倒的な軍事力をもつ米軍がマリアナ諸島を占領しました。マリアナ諸島につくられた米軍の基地から飛びたったB29爆撃機により、本土無差別空襲が日本各都市に行われ、本土が戦場となりました。空襲は、爆撃機だけでなく航空母艦から飛んで来る小型の戦闘機は機関銃で市民・子どもをねらいました。

学校では、この戦争は正義の戦争で、負けることはないと教えられていました。科学的な知識や正しい歴史の勉強はありませんでした。

女子の学校では航空機工場の集中的攻撃を避けるために、学校内に工場を設けていました。これを「学校工場」と言います。だからアメリカ軍の攻撃の的になったと言う説もあります。学校工場では生徒に労働を強制していました。千葉高女では、日曜日であるにもかかわらず学校工場に動員された2人の女生徒が空襲から逃げるより生産を重く見る風潮の中で、退避が遅れて死にました。当時の新聞は「機械を握って散る/暴爆の下の華・特攻魂の女学生」と伝えました。女子師範学校生徒は24時間3交代に労働が強いられていました。空襲時は朝の交代時間であったので犠牲者が増えました。

空襲記録運動

地域の人たちが作った千葉空襲を記録した本は、1980年発行の「千葉市空襲の記録」です。取材当時の132人証言者は、空襲当時成人だった人で記憶も正確です。その後、2009年秋に「千葉市大空襲とアジア・太平洋戦争の記録 100人の証言」が発刊されました。

現在、空襲被害者を救うための法律を作ろうとする運動が広がっていますが、被害者を実態調査することが大前提です。千葉市役所でも犠牲者名が調査されていません。市民運動団体が約450名の空襲犠牲者氏名を調べています。(ここまで本文2417字)

参考文献

松本貞雄編集千葉市空襲を記録する会、千葉市空襲の記録、1980年

千葉市、千葉市空襲写真誌、2010年7月1日

石橋正一著、幻の本土決戦 房総半島の防衛 第4巻、千葉日報、1991年

朝日新聞、1945年6月12日付け千葉版

100人証言編集委員会、千葉市大空襲とアジア・太平洋戦争の記録 100人の証言、2009年

脚注 焼夷弾（しょういだん）

木造建築物を焼き払うために使用される爆弾で、主にテルミットや油脂、黄燐や重油などが詰められています。

資料

日暮幸子作(「忘れたい日—千葉空襲」1975.11)
第28回千葉県展入選作品

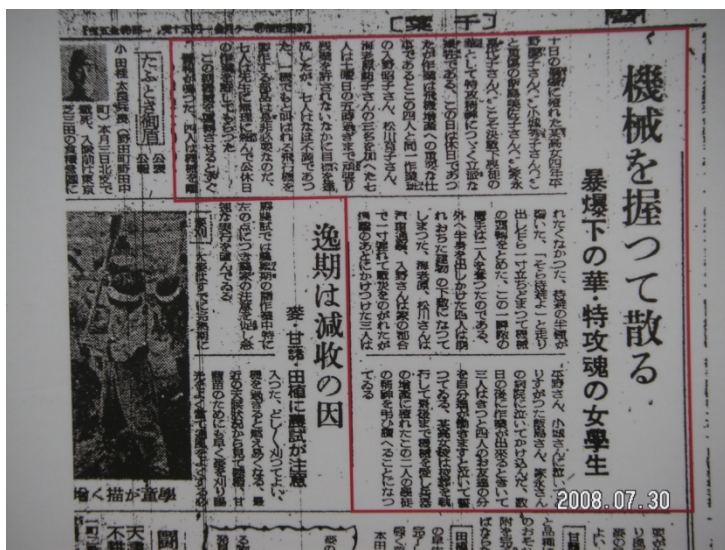


空襲による被害状況



千葉空襲写真誌

千葉高女犠牲者を報道する朝日新聞
(1945年6月12日)



千葉市内の陸軍施設があったところ

